



かせかけ

編集 沖縄県立看護大学
広報・情報委員会
発行 平成14年12月20日



記念碑「杏苑清泉」と教育管理棟

目次

- 国連大学高等研究所招へい講演…………… 2
- 本学の動向
 - 「21世紀のナーシング・リーダーシップを開催して」 4
- シリーズ教育・研究分野紹介…………… 5
- 教員紹介(よこがお)
 - 山口栄鉄 教授…………… 8
 - 棚原節子 助教授…………… 10
- 学内委員会シリーズ 2 進路対策委員会だより 11
- 海外研修…………… 12
- 大学行事
 - ・海外研修inハワイ…………… 13
 - ・国連大学グローバルセミナー
第3回沖縄セッション参加…………… 14
- 学生会活動…………… 14
 - ・渡嘉敷島一泊交流会
 - ・サークル活動
- 教職員の動き(新任教員)…………… 16

国連大学高等研究所(東京)招へい講演

〈平成14年5月〉



Nursing Higher Education and Research for International Health Development

Beverly Henry, PhD, Hon DSC

国際健康開発のための 高等看護教育および看護研究

沖縄県立看護大学教授
イリノイ大学シカゴ校名誉教授

この20年間でグローバリゼーションおよびテクノロジーにより世界のすべての国や文化が変わったといえます。経済的な相互依存や世界的な健康上の問題が増加して、国や文化の枠を越えた理解、協力が求められるようになってきました。看護専門職者は、健康増進、疾病予防、保健医療システムにおけるリーダーシップといった面で大きな役割を果たすことが可能です。また、このような役割を果たせるよう、高いレベルの教育を受けておかねばなりません。

日本の大学審議会によると、国際化への

対応が最重要課題の一つになっています。同審議会はまた、開講科目を国際性のある内容にするよう見直すべきであり、異なる文化や習慣を理解、尊重できる視野の広い卒業生が求められている、としています。国際健康開発において看護職者が献身的に取り組む必要のある事項として、1)国内外で他者へサービスを提供すること、2)人材・社会開発について理解すること、3)学際的に協働すること、4)保健医療・教育システムの開発法について知識をもつこと、5)世界を考え地域で行動すること、等があげられます。

看護教育の場は、病院から大学へと移ってきました。看護大学の多くが“国際的”であるとか“異文化理解”を重視していると公言していますが、国際看護学や異文化間看護学の領域についてはあいまいであることが多いようです。そこで“国際看護学”の定義の明確化に着手することを本日の目的とします。沖縄県立看護大学(以下「沖看大」とする)は、21世紀の看護職者に次のような事項が必要とされていると考えています。

- ・国内外において科学、文化、歴史、社会的組織等が健康に与える影響について認識すること
- ・健康、疾病、安全性、(健康増進・治療・予防)のためのシステム等に関し、十分な配慮と知識をもつこと

- ・ 不確実性および健康上の問題に関し、倫理性、論理性、柔軟性、創造性をもって予測、対応すること
- ・ 国籍や文化的背景の異なる人々と共に、リーダーシップを発揮し、人材、予算等の資源を配置し、協力し合うこと

上記の信条に基づき、沖看大の教育目標は、次のような看護職者を養成することです。1)医学・看護学を理解し健康上の問題に応用できる人、2)文化を正しく認識して考え、行動様式をグローバルな文脈で理解できる人、3)明確かつ批判的に思考し、正確なことばでコミュニケーションし、倫理性をもって意思を決定し、生涯学習を追求する人であり、これらの目標を達成するため沖看大の教員は、教育・研究における国際面、異文化面についての指針を使用して、健康開発のための学習モデルを作成しています。

高等教育における学習モデルは、カリキュラムの概念上の基礎となるものです。その中では、取り上げた情報の選択理由としての根拠とならんで、学生の到達能力のステートメントや科目内容(案)も示されず。沖看大の学習モデルには2つの軸があり、第1の軸には主要な概念として、看護、健康、健康増進、保健医療システム・政策、疾病、疾病予防があります。第2の軸には、経済、環境、人口統計、文化、技術があります。経済面が含まれているのは、財源等の資源が健康に与える影響について学生に確実に認識させるためです。環境面では、地域、全国、世界のそれぞれにおいて法、健康、保健医療システム、健康上のニーズ等に対応しながら、ケアが文化に適合したものになるように調整することを重視しています。人

口統計の面からみると、人口構成の変化が健康、保健医療システム、保健医療費等に与える影響を解釈できるようになることが卒業生に期待されます。文化面では、生活様式とその健康・疾病との関連性についての知識を用いながら、文化に適合したケアを計画、実施できる能力を卒業生に身につかせます。技術面では、卒業生がコンピュータによるコミュニケーション・情報技術を確実に利用できるようになることが含まれますが、グローバルなデータを様々な情報源から入手することにより、地域、全国、国家間それぞれにおいて健康上の問題や保健医療システム・政策・経済に関する理解を深めることができます。

さらに、この学習モデルの中に含まれる事項として、応用研究、中でもアクションリサーチ、プログラム評価、政策・方針分析、質改善のための測定、等を利用、実施することがあります。卒業生が備える能力としては、1)国際的に重要な知識についてディベートする能力、2)全国および国際レベルの健康上の問題に取り組むためにデータを整理する能力、3)高度技術・政策の面で国際的リーダーシップを発揮する役職に就きその中で科学的概念を活用する能力、等があげられます。

(翻訳 與那嶺 敦)



〈21世紀のナースィング リーダーシップ〉 を開催して



学長 上田 禮子

2002年11月1日に本学において3人のシンポジストと本学のビバリー・ヘンリー教授による教育講演が開催されました。本土からの参加者も加えて約350人の参加者があり、このテーマに関する関心の高さを示していました。理由は明白です。

社会全般にわたる変革期にあり各界でのリーダーシップが問われ、看護界においても例外ではありません。改革や刷新は強力なリーダーシップがなければ実現しません。見識があり、将来をみすえて判断し、速やかに対応する看護職者が必要とされています。このシンポジウムの目的は、地域(沖縄)、国(日本)及び国際的レベルで看護の立場から人々に新たな健康上のニーズに対応すべく必要とされる看護のリーダーシップについて共に考え、提案することでした。保健医療サービスに関する看護のリーダーシップには、①人々の健康上のニーズや課題に基づき、②事実をふまえて意志決定をして行う看護行動に責任をとること、③世界的視野で考え、それぞれの地域に根ざした活動のできる人材が求められています。

少子高齢化、医療費の高騰などによって保健医療福祉制度の見直しを含め抜本的な医療改革が検討されています。このような変革の

中で看護職者は、伝統的な職務の履行だけでは人々の健康上のニーズに対応することはできません。50年前に想像もできなかった人生80～90年を健康に生きるように人々を支援すべく拡大した職務を果たすべくリーダーシップが求められています。

このシンポジウムでは保健医療サービス・政策の中でも、保健医療提供の質改善と費用効果をみすえたケア、生涯にわたる人間発達、住民参加型にみる看護職者のリーダーシップに重点がおかけられました。すなわち、健康上好ましい生活習慣の形成と健康上の課題解決にはたす多面的な仕事の進め方—医療と看護、健康教育、健康開発、疾病予防、地域保健活動モデルの構築など—、看護職者による教育、予防活動におけるリーダーシップを期待されていることが話題になりました。演者はそれぞれ①行政上の課題、費用効果とケア、②地域保健サービスにおける新たな活動モデルの構築、③国内の病院、施設の構造、質改善のプログラム、人材育成、④教育機関における、大学教育課程の内容と新しい構造などを自らの経験をふまえて提言されました。参加者は新しいリーダーに求められる能力とリーダー像を知り、拡大した新たな看護職者の役割の開発に自らリーダーシップを発揮することが必要との認識を深められたと思います。目先のことにとらわれずに利用者の立場に立って創造的サービスを作り出していく舵取りをすることです。

来る2003年～2004年には米国から地域保健看護のリーダーを招へいし本会に続く講演会の開催を予定していますので学生、教職員と関心のある方々の参加を期待しております。



シリーズ 教育・研究分野の紹介



基本科目 保健医療情報

助教授 金城 芳秀

情報技術と世界規模の通信網の急速な進展に伴い、時間と空間を超えた情報伝達が実現されている。いつでもどこでも誰でも情報の入手と発信が可能となってきた。保健・医療の分野も例外ではなく、予防、疾病、治療、看護あるいは介護に関する情報で溢れ、むしろ情報の質を見分ける能力が求められている。すなわち医療関係者は専門職として情報を吟味した上で活用できる人材でなければならない。

そこで、保健医療情報では情報を批判的に考えることを第1としている。直感的であれ、まずは“情報を疑え”である。「いつ」、「どこで」、「誰が」、「何を」、さらに「なぜ」と「どのように」を自問自答することが基本となろう。第2に情報が生み出された舞台裏を看破する能力が必要である。個人的な体験・経験から実験、調査研究まで、1人の詳細な観察結果から大規模集団での観察結果まで、舞台裏は様々なのである。しかもそれぞれ制約が少なくないことを確認しなければならない。実践活動や研究活動の基本的な枠組みを理解せずに、これら活動から得られた情報に基づいて適切な意思決定を行うことはで

きない。第3は情報の活用である。活用はいわば現実に即した応用である。活用しないという選択肢があえて必要な場合もあろう。このような思考と態度に基づいて行動することを学生の到達目標としている。実際には、嘱託補助である上原香さんに支えられて講義・演習が成立している。

私は保健学士、保健学修士、保健学博士であり、保健学の一学徒である。疫学を専攻し、疾病の原因究明、疾病予防や健康増進に疫学を応用している。ちなみに保健学は英文ではHealth Sciencesと表現される。いつからか看護学では保健は看護の一分野らしい。確かに保健という看板が看護に衣替えしている時世である。時代に逆行しているのか、本来のあるべき姿なのか、本学では小児保健看護や地域保健看護のように領域名に保健看護が続いて表記されている。これは人材活用の一手段に過ぎないと達観すべきことかも知れない。いずれにしても、本学から巣立つであろう看護学修士・博士が数十年後には指導的役割を担うことを期待している。

残念ながら本学大学院の開設予定が平成16年度に延期された。卒業論文指導教員として私を選択した3人の第1期生は県外大学院も視野に入れて挑戦してきた。最終的に2人が北海道大学大学院医学研究科修士課程に進学を決めている。沖縄育ちの2人が取えて厳しい環境を選択したことに敬意を表したい。これから3人は卒論を書き上げなくてはならないが、互いに厳しく批判し合うこと、まずはそれからと考えている。卒論指導の相棒である成人保健看護の比嘉かおり先生も同意見であろう。



シリーズ 教育・研究分野の紹介



専門支持科目 心理学領域

講師 渡久山 朝裕

本学における心理学科目は基本科目・人文科学系の「心理学」、専門支持科目・保健医療学系の「応用心理」、「発達心理学」、そして同保健社会学系の「保健社会・心理技法」「保健社会・心理技法演習」である。「心理学」は琉球大学法文学部教授の中村完先生に、また「発達心理学」は同大学教育学部教授の前原武子先生にご講義いただいている。

「応用心理」の前半は社会心理学を中心に中村先生にご講義いただき、後半では私が臨床心理学を教えている。1年次の後期に開講されるこの科目で私は初めて新入生達と教室で出会うことになる。それで、私が担当する授業の第1回目は学生達とのコミュニケーションや彼らの意識・関心を把握することにほとんどの時間を割いている。具体的には、心理学についての印象や質問・疑問、授業への要望などを無記名で自由に記述してもらっている。看護職者をめざす学生達だけあって、人間の心理や行動についての関心は高く、鋭く切り込む質問や看護実践に結びつく質問などが述べられる。まれには心理学を読心術や超能力に結び付けて考えている学生もいて大変ほほえましいのであるが、心理学が行

動科学であることを理解してもらった絶好の機会と受けとめ、それらとの違いをていねいに解説している。

「保健社会・心理技法」と「保健社会・心理技法演習」ではそれぞれの授業回数を半分に分け、社会調査に関する講義と演習を本学講師の岡村純先生が担当し、心理テストやカウンセリングに関する講義と演習を私が担当している。学習効果を高めるための工夫として、私の授業は演習を先に行い、続いて講義を行っている。つまり学生達はほとんど知識のない状態で心理テストをいくつか体験し、その後、自分の結果をながめながら解説を聞き、解釈法や理論を習得するという手順を踏むのである。しっかりとした理論背景を持った心理テストを学べば学ぶほど、「心理テストは心の隅々まで全て見通すことができる」と期待していた学生は不満や失望を感じるようになるのだが、この授業では心理アセスメントの効用と限界を正しく理解してもらうことに力点を置いている。一方、学生達にカウンセリング技術を習得させるために使える時間数はかなり少ないのであるが、自作の録音テープ教材を使ったり、ロールプレイを取り入れたりして工夫している。

最後に私の研究分野から2つほど紹介したい。1つめは精神障害者への心理療法である。幻聴や妄想を訴える統合失調症患者の心の問題をどのように理解し、手当てしていくか研究している。その患者の自我強度や内省力、論理性等を考慮しつつ、病理構造を解きほぐしていく作業は時間と根気が必要である。2つめは自律訓練法を利用した行動療法である。自分自身の力で心身をリラックスさせ、あがり・緊張などを克服していくことのできるこのテクニックは大変有用である。「応用心理」の講義で自律訓練法を紹介すると、毎年数人の学生が“もっと詳しく知りたい”と私の研究室を訪れる。イメージ療法や系統的脱感作療法にまで話が及ぶと学生の目の輝きが増してくるのがわかる。向学心や知的関心を刺激する喜びをひそかに感じる瞬間である。

シリーズ 教育・研究分野の紹介

専門科目 小児保健看護



小児保健看護は、上田教授の他に、5名の教員が講義・演習と実習を担当している。2年次前期から、概論において子どもの成長・発達を生涯発達の視点から理解し、発達の評価法や子どもの健康、小児看護の理解へと学習を深めていく。小児各期の成長・発達の特徴と支援に必要な基礎的知識は必須である。概論終了後に看護方法Ⅰとして子どもの成長・発達と健康が、家庭や地域の中で形成されていく過程とその支援方法を学習する。この科目には、乳幼児の生活を中心に学習する部分と学童・青年期を対象とした学校保健・養護概説等も含まれる。学校保健の内容は地域看護の中で扱う大学もあるが、本学では、天野講師(平成13年度に退職)が専門とする領域であったので、当初より小児保健看護の中で教授してきた。

2年次後期には、疾病論Ⅲで中部病院の安次嶺非常勤講師から臨床現場で生起する問題を取り入れながら、小児疾患の講義がある。

3年次前期に看護方法Ⅱが開始され、小児各期の疾患・障害のある子どもの看護支援方法を、講義と演習を通して学習する。実習は2年次に保育所実習1週間、3年次に病院実習1週間がある。

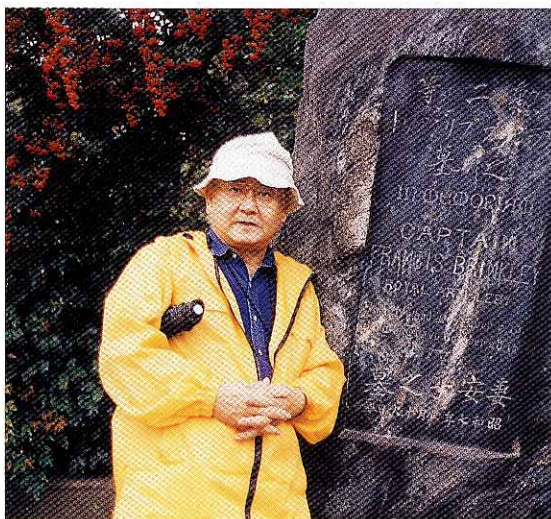
講義・演習・実習を通して、学生は出生前から青年期までの子どもと家族を対象とし、生涯発達の視点から、それぞれの時期の発達の課題や特性を学ぶ。また、現在子ども達のおかれている社会状況や環境に関する知識を個体と環境との相互作用の視点から学び、子ども達の成長・発達を評価し、健康児にも病児・障害児にも適切な看護支援が実践できる能力を身につけるべく到達目標を設定している。

〈教員の研究専門分野〉

- ・上田 禮子
生涯発達の縦断的研究および看護学への応用文化間保健看護学ことはじめ
- ・藤村 真弓
病児・障害児の同胞に対する支援システムに関する研究
- ・石橋 朝紀子
小児がん患児ケアの心理社会的支援に関する研究
- ・安里 葉子
乳幼児の事故に関する研究
- ・河田 聡子
文化と子育てとの関係に関する研究
文化間看護に必要な知識
- ・山城 桂
乳児の能力に対する養育者の認知に関する研究



教 員 紹 介 (よこがお)



影武者の「陰」～
英文古文書渉猟の旅

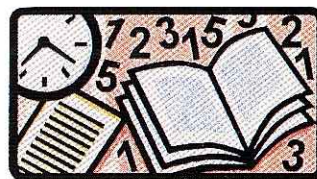
外国語(英語)教授 山口 栄 鉄

旅～その一。アメリカの古い大学図書館の奥深く眠る英文古文書探索の旅に出て幾年月、時としてとてつもなく大きな「宝」を掘り当て、その妙味に酔いしれる思いは筆舌に尽くせない。そのような僕の古文書発掘の一つが「吉田松陰自筆の密書」だった。「我ら兩人世界見物致したく候間、御船へ内密に乗り込ませ呉れられよ。尤も異国へ渡ることは日本の大禁に付、このことを日本の役人たちへ御話し候ては甚だ当惑仕り候・・・」と記される松陰の密書は江戸湾繫留中の黒船艦隊搭乗の一米人通訳官の秘蔵する歴大な英文及び和漢両語の外交文書の中に眠っていた。その経緯の詳細について全国に発表したのは1975年10月のこと、中央公論社の「歴史と人物」誌中においてであった。

旅～その二。現今の沖縄県がいわゆる「県」として日本国の一部に吸収されたのは明治も12年になってからのこと。それ以前の沖縄はなんと500年余りもの間、曲がりなりにも「琉球王国」として存在し、言語、芸能、社会生活のあらゆる分野にわたって特異な文化をはぐくんできていた。その琉球王国壊滅の裏に明治政府の裏方として暗躍していた一人の英国人、いや「英人影武者」のいたことを僕はかなり前から知っていた。当時、中央集権化、欧化主義、近代化の雄叫びのもとに推し進められる、いわゆる「琉球国処分」という明治維新政府の強行策が民主国家、近代国家を目指す日本国の国是に全く逆行するものであり、とんでもないことであるとして欧米諸国のメディア、知識人の多くが東アジアの新興国「日本」を激しく論難していた。その明治政府攻撃の矢面に立って敢然と明治政府いや日本国擁護論を展開していた「影武者」の名をフランシス・ブリンクリーという。影武者であったが故にブリンクリーは当時の日本国の知識人、メディア関係者の誰よりも明治政府の中核に通じ、その国策の詳細を熟知していた。後年ブリンクリーが明かす琉球処分、琉球事件の委細については僕の近著「琉球王国の崩壊」及びその英文姉妹編 *The Demise of the Ryukyu Kingdom* (2002) の中に紹介しておいた。その影武者ブリンクリーに今ひとつの知られざる「陰」のあることに気づいたのは今年の夏のことだった。フランスの琉球研究の第一人者パトリック・ベルベールの欧文編著「西洋の出会った大琉球」(2000~2002)十巻本の中にブリンクリーの陰が隠されていた。そこには、日本国による対琉球策に対し「琉球島占拠」とか「琉球島併合」といった強い言葉で応じ、「日中間に抗戦の暗雲」あり、などと報じる *Shanghai Courier* 紙に反論を寄せ、また

North China Daily News に寄稿しては薩摩の侵略そしてその後の圧力によって時の琉球王尚寧が署名した「掟15条」を英訳し、日本国の覇権の正当化にやっきとなっている一欧人の名があるのだ。その名はFrederic H. Balfour。「日本国最高権威の許しを得てこの一文を投じる」と言明するこの人物は、その肩書きを「日本帝国北京駐在公使団」としている。日付は1879年(明治12)8月2日。琉球事件をめぐる日中関係の悪化が世界の注目を集め、国際論議が白熱の極にあるまさにその頃の日付である。北京駐在の日本国公使の側近にF.H.B.のイニシャルを持つ欧人がいたということはついぞ聞いたことがない。それがフランシス・ブリンクリーのそれに違いないということについては今の僕には一片の疑いもない。しかしこのミドルイニシャルのHとはいったい何なのだろう。ブリンクリーにはミドルイニシャルがない。影武者ブリンクリーがそのまた「陰」の名に付してあるそのHがただ何となくつけられたものとは思えない。その謎に何としてでも迫りたいとの気持ちを抑えられない僕は去る10月の半ばころ東京渋谷の「青山霊園」に足を運んだ。明治政府の高官の優遇を受け、生涯を日本国で過ごし、ついに一度も古里アイルランドの地を踏まなかったブリンクリーの霊がそこに眠ることを僕は知っていた。小雨模様のその日の東京はいかにも重苦しい空気に包まれていた。灰色の墓石をますます黒っぽく見せている広大な霊園の管理室でブリンクリーの墓標の位置を確かめ、僕はゆっくりと歩を進めた。「勲二等フランシスブリンクリー之墓」と右から左へと横に記される墓標はあたりを圧する巨大な御影石のそれだった。墓標の下面には「妻安子之墓」と刻まれている。安子との間に生まれた長男JohnのミドルイニシャルはHではなくRで

ある。父親フランシスの右隣りにその墓石がある。さらに数坪のブリンクリー家墓地の隅々に目をやるとその片隅に、まるであたりをはばかりように灌木に囲まれた小さな墓石が見え隠れしていた。雨露の今だに乾ききっていないその草むらを手で押し分けると、長年の風雨を堪え忍んできたかに思われるその墓標にはかすかに次のように読みとれる文字が刻まれていた。Henry Francis Brinkley...。影武者ブリンクリーのミドルイニシャル(に違いない)そのHがその姿を現わしたことに僕はひとまず僕なりに満足はしたものの、ヘンリーとは一体何者なのだろう？ 日本人妻安子との間に生まれた長男ジョンはフランシスが46歳の時の子である。仮に(これはあくまでも仮にであるが)フランシスにそれ以前の子があり、それがヘンリーであるとすれば、その墓石にかすかに読みとれる「1878年生まれ」のその子はフランシス37歳の時の子ということになる。そしてその子はその頃満一歳...。当時の横浜在留の異人さんの間では土地の日本人女性との間に「隠し子」を作ることはそれほど珍しいことでもなかった。ヘンリーがフランシスの隠し子であったかどうかはともかく、影武者ブリンクリーがミドルイニシャルに使っていたHがただ単に無意味なイニシャルでなく、それどころかヘンリー・フランシス・ブリンクリーというれっきとした名、しかもファーストネームのそのイニシャルであることに僕は一応の満足をおぼえている。日欧琉交流史の謎解き、僕の英文史料渉猟の旅はこれからもまだまだ続きそう...



教 員 紹 介 (よこがお)



かせかけの糸を戻して迎えば

基礎看護 助教授 棚原 節子

沖縄中央病院看護学校を卒業、即、臨床看護婦としての就職を振り出しに臨床看護婦28年、教育機関での勤めが約20年になった。

就職してから6か月後に米陸軍病院の手術室研修を2か月間受け、手術室での看護業務を学んだ。先輩看護婦たちが行っている手術室業務は、米陸軍病院の方式を移入したものであった。米陸軍病院での無菌操作は基本原理が踏襲されていて、物品を工夫して使わなければならない沖縄の病院でも適用できた。

1959年、琉球政府立那覇病院の新設に伴い沖縄中央病院から転勤、手術室と救急室兼外来の業務を勤めた。当時の政府立病院は、Open Systemの形態をとっていたので外来の設備は無く、救急室と同室だった。現在の看護大学図書館のある場所に手術室と救急室が隣接していたので、ここに立つと当時の思い出はつきない。1962年の約1年間、中華民国国立台湾大学病院において麻酔看護婦研修を受ける機会を得た。この研修からは看護する立場から対象を考えたとき、健康障害の種類、健康のレベル、発達段階

において自ら生命の危機から脱する事の出来ない対象として共通であり、この概念は看護業務に投影されることを悟った。ちなみに、手術中においては、多くは麻酔医が直接、生命維持や管理を行う。それに対して病棟では何らかの形で24時間ナースが勤務しているの、ナースが直接患者の生命を管理していることになる。

1982年、病院の副看護部長を経て、琉球大学医学部保健学科基礎看護技術担当教員となった。基礎看護技術の授業は臨床看護で実践した看護を基に行なうものだった。臨床の場での看護の認識は対象の安全、安楽を守り、医療事故を未然に防ぎ、いやしくも不利益を与えてはならないこと、そして思いやりの心で看護することであった。このような、個人的な観念での看護行為は、多様な対象に優れた看護が出来る基礎的な能力を育成することにはならないことに気づいた。看護技術には看護の目的、対象、方法の一貫した論理が含まれており、看護技術を看護者のこころの表現として使えることをねらった基礎看護技術の授業を展開している。

1992年、琉球大学保健学科を退職して郷里の名護に開設された北部看護学校で奉職、1999年から本看護大学に勤務させて頂いている。町で知人に出会うと「大学出身の看護師はどんなことをするのか」とか、「どこが違うのか」など聞かれるが、私はこう云っている、看護することに喜びを感じ、看護された対象があなたに看護されて良かったと喜ばれる看護師になると……。

看護の道を歩みはじめてからやがて、48年になろうとしている。戦争直後の無の状態から看護大学が開設され、一期生の卒業を目前にする時期に至っているが、その間に体験した数々の思いが、一つ一つの節目を乗り越えるたびに自分も新たに変わっていったことを実感している。



■学内委員会シリーズ ②

*** 進路対策委員会だより ***

進路対策委員会委員長 大嶺 千枝子

来春3月、県民、とりわけ沖縄の看護界にとって半世紀にも及ぶ念願であった看護大学の第1期生が巣立ちます。当委員会は、社会の期待と学生の希望に添うべく、適切な進路指導を図るため平成13年4月に設置されました。

県内の看護師養成の概数は大学2校で150人、三年課程2校で154人、3校の進学課程で220人、准看課程2校で200人の計724人である。来春からは大卒者が約21%を占めるようになり、看護の質の向上に貢献が期待されます。しかし、県内のこれまでの看護師養成が看護学校中心でなされてきたことから、施設側の「大卒者採用に対する構え」が危惧され、経営者の立場の視点からくる「大卒採用の躊躇」が少なからず懸念されます。教育する側は、教育の向上は看護者の質の向上となり、患者の尊厳を高め、適切な看護で命の見守りがなされると信じています。学生の立場に立てば、養成所とは比較にならない自己投資の基に、大学教育として看護を科学として学んで得た「免許」の行使は、自分の納得の行く施設で、場所で、看護活動の中で活かしたいと云う思いが強く感じられます。このような雰囲気の中で、委員会は学生の希望に添いながら現実を直視させると共に、雇用者側に対しては、多様化するニーズに対応した高度な看護教育の必要性を強調し、一般社会に対しては健康や命の大切さについて理解を深めることが求められています。委員会活動は何をなすべきか、時宜を得た指導をどう展開するのか迷いながら活動しています。これまでの活動概要は平成13年7月に3年生に第1回アンケート調査を実施、約65%は就職を考え始めており、少なからず不安や意見も見ら

れました。多くの学生が県内就職を希望していることから、10月に県内の88の病院に需要調査を行い、33の回答施設から約200名の採用が見込まれました。今年2月、第2回目の調査では就職意識が76%と高まり、その不安も就職関連の情報、就職の可能性や国家試験、公務員試験の情報不足、看護技術の未熟、希望する病棟で働けるか否か、市町村採用試験等と具体化しています。県内就職は多くの学生が県立病院を希望するため、4月に県立病院の職員採用説明会を行い、6月は県内の23施設の求人説明会を開催、学生は熱心に看護サービス等に関する情報把握に努めていました。更に、私達は5月～7月の毎月曜日に個別指導を実施しましたが相談者が少なく、学生の対応に困惑しておりました。一方、学生はインターネットを活用し、相互の情報交換及び教員の紹介等で夏期休暇頃より県外訪問を行う等の動きがみられました。このため、就職試験に備え、後援会の協力で就職試験対策として特別講義・小論文の書き方や面接試験に関する講話を行い学生支援にあたってきました。

後期、学生は地域保健看護実習、統合実習及び卒論と押し寄せる学習に追われる日々をかいくぐって就職活動に余念がありません。一部の学生は迷いの中で日々を過ごしており、不安を抱えながら希望する施設を求めめぐねているのが現実問題です。

時宜を得た活動に務めていますが、きめ細かな個別指導が困難なことから全教員による適切な指導をお願い申し上げます。委員会活動に関するご意見、助言をお待ちしております。



熱心に施設の説明に聴入る学生達

海外研修

「第10回韓日メンタルヘルス研究会」
に参加して

精神保健看護 伊礼 優

今年の日韓サッカーワールドカップは人々を熱狂させました。私は8月に余韻の残る韓国で、「第10回韓日メンタルヘルス研究会」に参加する機会を頂きました。この研究会の参加は2度目ですが、自己成長に影響を与える機会であると実感しています。今回の参加者は研究室のスタッフの他、精神保健看護の卒論生、東邦大学および獨協大学の学生も加わり、活気ある若い集団の参加でサッカー同様に熱狂的な時間を過ごす事が出来ました。

当研究会の代表者は、日本側が佐々木雄司先生(前琉球大学、精神保健学教授)、韓国側が李奎恒(Lee kyu-Hang)先生(前大韓神経精神医学会会長、現啓耀病院理事長・ソウル大学医学部外来教授)であり、両国の有志が年に1度集い意見交換や関係機関の訪問を目的として平成5年に開催されました。メンバーはコメディカルが中心であり、病院や地域における精神保健の活動に携わっている看護師や保健師、大学教員、精神科医、ソーシャルワーカー等で構成されています。日本からは東京と埼玉、沖縄のグループが参加し、コミュニティメンタルヘルスの知識を深めています。

この研究会は両国で毎年交互に開催され、今年韓国は啓耀病院を主会場に2日間の日程で行なわれました。初日は仁川空港に到着後バスで移動し、江南と安養にある2ヶ所の精神保健センターを見学しました。江南のセンターは市内の民間ビルの1室にあり、安養は保健所内にある等、設置場所に日本と違う特徴を感じました。韓国では1997年に日本の法律を参考にした精神保健法が制定されていますが、現時点の地

域支援はディケア活動を中心に取り組んでいる印象でした。また日本では精神保健福祉センターは各県に1ヶ所以上設置されていますが、韓国では都市地区やモデル地区に設置しつつある現状で、都会と田舎に格差がある事を知り、韓国の精神保健対策の不十分な一面も感じました。

2日目は両国から報告がなされ、意見交換が活発に交わされました。その様子から10年間の友好関係の深さや重さを感じる事が出来ました。両国の精神保健法が類似している面もあり検討しやすい面も多々ありましたが、文化や歴史には相違点も多く存在します。例えば日本では、精神障害者の家族や同胞の負担を軽減する考えになりつつあると思われませんが、韓国の報告では同胞に対して役割を大きく求め、家族の絆に関して違いを感じました。研究会後半には総合討論と佐々木先生による総括が行なわれ、両国の相違点を考える中で、私自身の疑問点の解決や視野の拡大等の土産を持ち帰る事が出来ました。

余談ですが、土産話と言えば研究会以外の活動も楽しみでした。特にキムチ、ビビンバに代表される食文化は美味であり満喫しました。2泊3日の忙しい研究会でしたが、「国際研究会や国際交流の参加は疑問点の解決・視野の拡大になる」という実感を飛行機の中で噛み締め、充実感に浸ることが出来ました。



昌慶宮(チャンギョングン)にて

海外研修

ハワイの蝶はホスピスに舞う
 ～第2回ハワイ研修セミナー～

国際交流委員会委員 岡村 純



ビーチピクニックのひとつ

Dazzling!!! 学生達へのイングリッシュシャワーの洗礼はこの身体いっぱい使ったJose先生の大音響で幕が切って落とされた。昨年度に引き続いて実施されたハワイ研修セミナーの開幕である。度肝を抜かれたのは1年生5人、2年生4人、3年生17人、計26人の学生達ばかりでなく、3人の引率教員(比嘉良充団長を除く)もカルチャーショックである。

このセミナーは、「国際的視野をもって保健看護に貢献できる人材の育成」を目的に、ハワイ大学マノア校・カウアイコミュニティカレッジとの交流協定に基づき、学生の交流事業を行なっているものである。カウアイコミュニティカレッジでは英語研修、医療施設見学、異文化理解のための活動を最初の2週間で、マノア校看護・歯科衛生学部では看護専門分野の講義、医療施設見学を後の1週間で実施している。ここにその一部を紹介したい。

英語研修のJose先生はその講義方法で何度も賞をもらっている権威で、3時間の講義のなかで体を動かす、歌う、踊る、作品をつくる、戸外に出る、グループディスカッションするなどを取り入れて、集中力を持続させる工夫がされており、「楽しく」「英語に慣れることができた」が学生達

の評価である。英語を身体全体を使って表現するtoolとして訓練するので、学生には積極性と表現力が身についたようである。施設見学では、長期療養型病院のビーチピクニックに参加し、砂浜でも押せる車椅子や患者用のフロートなどを用いた介助は、「沖縄から舞い降りた26名の天使」として地元新聞を飾った。

マノア校での専門の講義では、第一線のNurse PractitionerであるBoydさんの講義「ヘルスセンターにおける看護師の役割」は学生達には深い感銘を与え、連邦ライセンスをもち、一次診断を行ない、薬も処方でき、簡単な手術もこなすNPに学生達は憧れを抱いたようである。学生の「なぜ医師ではなくて、NPを選んだのか」という質問に対して、「医師は病気そのものから接近していくに対して、看護師は患者の背景から病気の原因を追究し、看護を行なう」と力強く述べられたことは、看護を学ぶ学生達に送られた強力なエールとなった。

以上、セミナーのほんの一部を紹介したが、学生達は、語学研修を通じて英語によるコミュニケーション能力を高め、主体的な学習態度を形成するとともに、専門の講義によって学習意欲を刺激され、施設見学によって日本の医療と看護の現状を相対化する視点を身につけていた。とくに、初めての試みであった1年生の参加は、専門知識の点で理解が不十分なところがあったものの、英語習得の意欲や留学の希望、アメリカの看護師資格の取得など、4年間の学生生活の目標を明確にできた点で評価できる。

最後に、私事になるが、ハワイでカメハメハアカタテハとハワイアンブルーという二種類の蝶に逢うことが楽しみだったが果たせず、ホノルル郊外の閑静な住宅街にあるホスピスハワイでそのシンボルとなっている素晴らしい蝶たちに出会えた。人は亡くなっても蝶に生まれ変わるというのである。セミナーに参加した学生達が蛹という今までの殻を打ち破り、ハワイからそれぞれの目指す方向へ舞い立つことを期待したい。

国連大学グローバル・セミナー 第3回 沖縄セッションに参加して

(平成13年12月)



国連大学グローバル・セミナーに参加して

2年次 吉川 加奈子

あるテーマについて一晩中熱く語り明かしたことはありますか？私は国連大学グローバル・セミナーに参加してこの貴重な体験をし、すばらしいものを得ました。

セミナーでは全国各地から大学生や社会人が70名ほど集まり、12名1グループを作って議題について討論をします。朝9時から夕方5時半まで議題にそった専門の先生方の講義を受け、夕食後にグループで討論会をしていました。それだけではなくフィールドワークとして沖縄の御嶽や城跡を巡ったり、琉球芸能を鑑賞したりと沖縄文化に触れる機会もありました。セミナー最終日には、グループで話し合ったことの発表会がありました。

参加している人は文学や経済・教育学部などの人が多く、セミナーで得られる知識は多くあります。しかし、私はそれよりもっとすばらしいものを得ることができました。それは人と人の出会いです。人がいれば、その人の数だけさまざまな考え方があるということを学びました。また、人と人の出会いは異文化交流であり異文化理解です。異文化同士の衝突はあたりまえで、「世界平和」なんてあり得ないんじゃないかと思うほど、熱い討論戦争が繰り返されました。しかし、グループの仲間同士の友情は深まりました。今でもグループの仲間が沖縄へ遊びに来たり、私が仲間の所へ遊びに行ったりと交流が続いてます。共に刺激しあって成長してゆける、大切な仲間を得ることができました。



いろいろな人と出会えたグローバルセミナー

2年次 味元 みのり

2泊3日という短い期間ですが、とても充実した内容の濃い3日間でした。

「戦争と平和～世界平和を目指して～」というテーマで行われたのですが、教授や研究者など、民族紛争や沖縄の文化に熟知している方々が非常に興味深い、大学では学べないような講演を下さったり、沖縄の斎場御嶽(セーファウタキ)を訪れ、沖縄独特の文化に触れたりしました。毎日仲間たちと講演の内容や、今の日本、戦争、平和、沖縄について夜遅くまで語り合い、時に激しく議論したことはとても刺激的で、自分の普段使われていない脳が動き出す感じでした。

私達看護学生はこれから様々な文化、価値観を持った人たちと接していくことになると思います。このグローバルセミナーにはいろいろな考えを持った人たちが参加します。大学を休学して2～3年企業で働いていた人、主婦をしながら大学の夜間に通っている人、小学校を建てる為ボランティアでタイに行った人など本当にさまざまな人がいました。こういった人たちと過ごしていくことは自分の持っている視野を広げ、いろいろな人間と接する良い機会になりました。

私達看護学生はこれから様々な文化、価値観を持った人たちと接していくことになると思います。このグローバルセミナーにはいろいろな考えを持った人たちが参加します。大学を休学して2～3年企業で働いていた人、主婦をしながら大学の夜間に通っている人、小学校を建てる為ボランティアでタイに行った人など本当にさまざまな人がいました。こういった人たちと過ごしていくことは自分の持っている視野を広げ、いろいろな人間と接する良い機会になりました。



学 生 会 活 動



渡嘉敷島一泊交流会について

学生会長 井手 洋陽

9月22日、23日に「渡嘉敷島一泊交流会」と称し渡嘉敷島へ行って参りました。今回は、天候にも恵まれ、大変充実した時を過ごすことができました。教員の方も多数参加され、ビーチバレー、海水浴、その後の入浴、バーベキューを通し、教員と学生との交流、また、学生同士の親睦も深まり、一泊交流会としての成功を収めることができました。

今回の交流会に際し、私たち学生会役員は、学生会員のまとめ役であると言うことを改めて自覚するとともに、自主性の問われる学生会役員としての仕事は、非常にやりがいのあるものだと感じました。

しかし、全学年が初めて揃った今回の交流会では、2年生の実習、4年生の卒業論文の忙しい時期と重なったため、2・4年生の参加が少なかったことは、大変残念に思っています。今後の卒業式を初め、様々な行事、また、学生からの意見・要望に対し全力で取り組んでいこうと思いますので、沖縄県立看護大学学生会を温かく見守ってください。



サークル紹介(海部)

海部部长 新城 俊

はじめまして、「海」部(ウミブです。カイクではないです。)の部長をしている新城です。はじめはダイビングサークルとして活動していたのですが、つりやビーチパーティなどダイビング以外でも海で活動することが増えてきたために現在では海部と名乗っています。海部を設立したのは、学生の3割をしめている県外出身者に沖縄の海の美しさを実感してもらいたかったのと同時に、県内出身者に沖縄の海の素晴らしさを再認識して欲しいと思ったからです。実際にダイビングをしているのは県外出身者が約9割とちょっとさびしい状況です。逆に、ビーチパーティの参加者は県内出身者の方が多く、県民性の違いを垣間見れた感じがします。ダイビングといえば、危険なスポーツと思われていますが、北谷町にある「サクセスマリリン」さんが全面的に協力をしてくださっているため、事故もなく安心して安全に潜ることができますし、また、現在スポーツ傷害保険への加入準備をしています。沖縄の海はハワイ研修中に「沖縄から来たならここで潜るより地元で潜ったほうがいいよ」とハワイの人に言われるぐ

らい世界でもトップクラスの海です。そんな沖縄の海を楽しむのが私たち海部の目的です。



かせかけとは、琉球古典舞踊女七踊りの一つです。かせかせとは紡いだ糸を巻く道具で、総掛けとは布を織る糸をこしらえている様子を指しています。この踊りのように丹念に糸を紡ぎ布を織って着物に仕立てていく、その一途の心と「技術」・「感性」は、「知識」の継承・創出とともに、本学の看護職者を生み育む教育・研究の原点に相通するものであらうと、広報誌の名称にしました。



かせと枠

◆教職員の動き(新任教員)◆



助手 呉地 祥友里(くれちさゆり)

7月より地域保健看護の助手として着任しました。よろしくお願ひいたします。
 今まで外科・整形外科と脳外科の看護を経験し、その後以前から興味のあった訪問看護に携わりました。
 助手として勤務するのは初めてですが、周囲の方々に支えられて不安なく過ごしています。今は日々学生から刺激を受け、自分の学生時代の頃を思い出しつつ(成績は悪かったのですが・・・)教育に携わっています。今後は私が地域保健看護で何ができるか探求していきたいと考えています。
 神奈川県から沖縄県にきて半年がたちましたが“うちなーぐち”はまだまだなので、皆様の“うちなーぐち”での話しかけお待ちしています。



助手 山口 智美(やまぐちさとみ)

はじめまして。成人保健看護教員として10月1日より着任いたしました。長崎県出身で、沖縄のことはただ今勉強中です。沖縄は長崎同様歴史的・外交的に重要な役割を担ってきた背景のもと、素晴らしい“チャンプルー文化”がルネッサンスのごとく咲き誇っていると考えます。それは沖縄の看護の世界にもあてはまる事かもしれません。百聞は一見にしかず(Seeing is believing)といいますが、この与えられた好機に是非沖縄文化さらに沖縄看護の文化(Nursing Culture)を勉強させて頂きたいと思ひます。おじゃまします、そしてどうぞよろしくお願ひします。



助手 山城 五月(やましろうさつき)

はじめまして。10月1日付けで母性保健看護助手に着任しました山城です。どうぞ宜しくお願ひ致します。今年の6月にアメリカのペンシルバニア大学修士課程を修了したばかりで、私自身、学生から指導者へのトランジションに戸惑いながら、その一方、学生への指導法・介入法などを効果的に展開していくにはどうしたらよいのか考えをめぐらしてはどこかワクワクする気持ちもあります。米国留学で学んだ事、自らの就学期間に経験した事を研究・教育機関に活かし、看護学生と関わりながら、日本の看護だけでなく、外国ではどうなのか国際的な視野を持って評価し考えていける人材の育成に貢献できればと考えております。看護の理想と現実、社会・文化的背景なども吟味しながら他国の看護を取り入れるばかりではなく、日本の看護を世界へアピールする事も忘れないように頑張りたくと思ひます。

編集後記

表紙の草木も季節を映して少し寒そうに見えます。号を重ねるごとに編集作業も少しずつ軌道に乗ってきたように感じますが、細かな点ではまだ検討の余地もあることと思ひます。

「かせかけ」紙面への皆様のお声をいただき、親しみある紙面づくりに努めてまいります。(園生)

広報・情報委員会

沖縄県立看護大学

〒902-0076

沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号

TEL(098)833-8800(代表) FAX(098)833-5133

<http://www.okinawa-nurs.ac.jp>